

東アジアレビュー

● THE EAST ASIAN REVIEW

月刊 東アジアレビュー 2011年10月号／No.178 発行:東アジア総合研究所

【視点】	ASEANNにおける共通の アイデンティティとは —マニラ国際会議報告	平川 均…………… 1
【報告】	代を継ぐ宿題、生活の安定的向上 —30年ぶりに見た平壤	小野田明広…………… 3
【報告】	第10回 北朝鮮問題セミナー 報告	編集部…………… 11
【案内】	第11回 北朝鮮問題セミナー 案内	編集部…………… 11
【編集後記】	米同時テロ10周年に思う 長春で感じたこと	清…………… 12 R…………… 12



ASEANNにおける共通の アイデンティティとは —マニラ国際会議報告

平川 均・Hirakawa Hitoshi
東アジア総合研究所 所長・名古屋大学教授

❖フィリピン発展モデルの探求

この夏8月24日と25日の2日間にわたって、フィリピン全国産業労使関係協会主催のフィリピン全国労働労使関係総会に参加した。フィリピン大学労働労使関係学部(UP SOLAIR) ボニファシオ・ホールが会場であった。もう15年近くの親しい友人であるフィリピン人のDr. Ferdinand C. Maquito氏がフィリピン大学労働労使関係学部に私を紹介したことで、今年の3月同学部訪問が実現した。

その折にSOLAIR学部長のDr. Jorge V. Sibal教授をはじめとして主なスタッフとの話合いがもたれ、今年8月に開催される同会議で発表しないかと誘われたことがきっかけである。過去5年ほどだがMaquito氏と意見交換をしてきたフィリピンの産業化の研究や、昨年来ベトナムで行ってきた企業調査などの問題意識がこの会議の趣旨と一致していたことが誘われた理由である。

同会議は実質的にフィリピン大学SOLAIRが組織しており、私の関係する報告の概要は実質的にはSOLAIRの審査を得て正式に承認されたように思う。幸い共同研究者であるハノイにある貿易大学のDr. Nguyen Thi Bich Ha教授やミャンマー出身の名古屋大学経済学研究科研究員のDr. Than Than Aungさんも参加を約束してくれたので、私の関係では2つの共同研究報告が実現した。

フィリピンでの発展モデルにかつての日本型経営の視点を加えようというのがMaquito氏の主張であり、その視点からの報告が1つ。またベトナムの発展で注目されるのが海外からの直接投資であるが、地場の企業や産業の発展も同時に起こっている。われわれの地場企業のアンケート調査では突っ込んだ検討が必要だが、イノベーションに対して地場企業の積極性は確認できるというのがもう1つの報告であった。

前置きが長くなったが、全国会議のテーマは「フィリ

ピン雇用関係の諸問題：フィリピンとアジアの場で競争力ある産業を創る」であった。会議の趣旨は、フィリピン（とASEANの）労働者が経済統合の進む中で権利を拡大しつつ、どう社会を発展させていくか、というものである。

第1日目は国歌の斉唱に続いて、ILOマニラ所長、フィリピン全国産業労使関係協会会長、フィリピン大学SOLAIR学部長の挨拶に続いて、基調報告がフィリピン大学副学長によってなされた。報告はASEAN統合と労働者の役割、及び労働者の権利に関する各国の現状の確認であり、報告ののちディスカッションが行われた。

午後から2日間にわたる各セッションの報告が行われた。大きく4つの領域（トラック）で、それぞれ幾つかのセッションが生まれ、企業の組合関係者、市民活動家、フィリピン大学の研究者などが参加して活発な報告と議論がなされた。

❖働く人々の権利と豊かさの獲得は深刻な問題

プログラムは以下の通りである。トラックI（「労働と組織をマネージする」）では、ワークショップ（WS）としてI-A～I-Cの3会場で合計8本の報告が行われた。報告タイトルは、「病院のサービスに関する患者の参加」、「企業と産業のための人的資本開発アプローチ：産学連携戦略」、「学産連携：人的資本促進モデル」、「風聞：労働関係や執行へのインパクト」、「大学の学部の存在意義に影響を与える諸要素：マニラ大学地帯におけるカソリック系大学の事例」、「貧困への労使関係/人間関係の展望：フィリピンの事例」、「ベトナムにおける産業高度化と人的資源開発」などである。

トラックII（声と代表者）ではII-AとII-Bの2会場で6本の報告が行われた。「共有型成長の観点からの日本型労働契約の比較経済分析」、「トヨタ部品供給企業の発展」、「フィリピン航空での労働争議と労働者戦闘化の根拠」、「ヌエバエシジャにおける農業学生の雇用準備」、「フィリピン婦人労働者エンパワメントのための訓練・学習プログラムの比較分析」、「北アメリカの有機・自然食品運動：フィリピンとコミュニティ参加」などである。

第2日目は午前中に総会が開かれ、午後から報告セッションになった。トラックIII（家族とコミュニティ：市民社会の参加、インフォーマル・セクター、労働移動、健康および動労生活のバランス）ではIII-AとIII-Bの2会場で、合計7本の報告が行われた。

報告タイトルは「売春の原因、経済及び貿易の脆弱性に関する分析」、「経済不況下におけるフィリピン製造業及びサービス業の性別賃金ギャップの拡大」、「海外（日本）で芸能活動を行う人々の帰国活動」、「OFWs（フィリピン人海外労働者）の経済への再統合」、「フィ

リピンにおける不安定労働者」、「NOVADECIヘルスケア計画の事例研究」、「1986年から現在までのフィリピン共同組合経営の問題と展望」である。

トラックIV（制度、過程、及び結果）ではIV-AとIV-Bの2会場で合計8本の報告が行われた。「労働法とグローバル経済」、「フィリピン・コールセンターにおける転職、声、リスクと協力」、「フィリピン企業の社会的責任（CSR）の社会的説明に関する評価」、「東マニラホテルとローレランド・ファームリゾート：リザール州の企業の社会的責任」、「労働教育の代替的配給モデル」、「農業改革への非公式な障害」、「封建的労働システムと貧困：フィリピンの経験」などである。

報告内容は実に多岐にわたっており、またその課題は深刻なものが多く、参加者の意識は高かった。印象深いものの1つは基調報告であり、政治体制の多様性を超えて労働者の権利を拡大することは豊かな社会を創るというASEANの目標である、その意味で現在はASEAN共同体建設の交差点にあるとの趣旨である。ASEANの中で相対的に停滞するフィリピンにとっては働く人々の権利と豊かさの獲得の問題は深刻な課題であり、自ずとリアリティを持つ報告であった。ILO憲章での労働者の権利、結社の自由などの条項の批准の有無、あるいは批准年が構成国の一覧表として提示されたが、ASEAN内の多様性を具体的に示していた。

❖ベトナムの急速な発展に関心

また、ベトナムからの研究者には多くの参加者が関心を示し、ディスカッションでの主要な議論の一つとなった。実際、過去20年程のベトナムの急速な発展は、フィリピンでは極めて大きな関心事である。何故、それが実現しているのか、何故フィリピンは停滞しているのか、直接に多くの質疑があった。ハノイから参加したNguyen教授は、集中的な質問に答えて政策の重要性を指摘していた。また、ベトナムと比べてフィリピンのインフラ部門がこれほどまでに発達しながら貧富の格差がこれほどまでに大きいことに率直に驚いていると、初めてのマニラ訪問の印象を率直に語っていた。経済学分野の報告では、フィリピンの経済成長の雇用への効果が他の国に比べてとりわけ小さいことが数値で示され、また、農地改革は各国でどれほどの期間を要したのか、フィリピンではどうかなどの報告がなされ、多岐にわたる論点で活発な議論がなされていた。

閉会式では、参加者全員に参加証が授与され、また、たまたまと思われるが、新しくフィリピン大学SOLAIRの新学部長が決定したことが紹介され、新学部長による最後の挨拶をもって2日間の会議が終了した。大きな多様性がありながらも、ASEAN地域に何か共通のアイデンティティのようなものがあるという印象を受けた今回の会議であった。

報告



代を継ぐ宿題、生活の安定的向上 —30年ぶりに見た平壤—

小野田 明広 ● Onoda Akihiro
東アジア総合研究所 副理事長

9月9日、夏の日差しの名残が残る平壤中心部の金日成広場。日本と国交のないDPRKを30年ぶりに訪れた。何が変わったのか、変わらないものは何なのだろうか——。（*注1）

滞在はわずか8日間、見聞の範囲も限られていたの
で「群盲 象を評す」断片の寄せ集めとなるが、感じたことの一端を報告したい。

* * *

その日は建国記念日の祝日で、既に前日から平壤駅ははじめ市内の主要ロータリーには「63周年」の告示塔が立てられ、祝賀の赤旗が飾られていた。（写真1）

直前にならないと訪問先が決まらないのは、昔も今も変わらない。「あす朝は7時半集合」と訪朝団の一行に前夜告げられたとき、祝賀パレードを見ることができそうだと予感した（*注2）。

この行事のため地方からも大勢が訪れて市内はにぎわっていたのだが、移動の車窓から見ると人通りが
少ない。交通規制が敷かれたようで、一行のバスも少し離れた場所で待機させられた。ロシア極東部と中国を歴訪した長旅から戻って2週間足らずの金正日総書記が、姿を見せるのだろうか。

民兵組織「労働赤衛隊」の軍事パレードを観覧する場所は、金日成広場を見下ろす人民大学習堂。前回81年の訪朝時に建物は完成間近の段階で、指導政党・労働党の書記だった金正日氏が視察し「近代化とオートメ化」の必要性を強調した場所だ（*注3）。当時の



写真1 平壤駅前ロータリー

同行者は軍長老だった呉振宇氏。金正日氏の父親に当たる金日成主席とともに抗日パルチザン闘争を戦い、軍総政治局長や人民武力（国防）相を務めた。最高指導者になっていく金正日氏を後から支える役割を果たした人物だった。主席死去の翌年1995年に後を追うように亡くなっている。

今回の閲兵式を指揮したのは、その呉振宇氏の息子とされる呉日正・労働赤衛隊司令官（労働党部長）だった。「有力若手2世勢力」の1人だ。

会場の警備は厳重で、カメラは事前にまとめて預け、メモ帳、筆記用具、小銭、ティッシュなども持ち込み禁止。正装で紙幣とハンカチだけ持って臨む方式は、故金日成主席の遺体が安置されている錦繡山記念宮殿も同じだった。

案内されたのは要人が席を占めるひな壇の右下。後部列にアラブ圏など各国の駐在武官団が並ぶ。

広場の向こう正面には、左から右に順番に「白頭山革命の精神」「（金日成）首領に従って千里」「先軍革命の忠誠軍」とアピール幕が並び、労働赤衛隊の旗印で締めくくる。国旗掲揚の後「金日成將軍の歌」の演奏とともに拍手が起こる、要人が入場したようだ。

ひな段の手前の一段下がったところに観客席と分離する溝が走っていて、間仕切り壁がある。背伸びをしても、高いひな段の中は見えない。広場の後方に整列していた人々が前に進んで来て、手にした赤い花と大型カードを掲げて人文字を作り、バツバツと音を立てながら切り替えていく。「金日成」「（労働）党章マーク」「金正日」「党章」、そして再び「金正日」だ。金永春人民武力相が「敵の侵略があれば本拠地まで無慈悲に踏みつぶし、統一偉業を成就する」とあいさつした後の献辞も「金日成」「金正日」「労働党」「栄えある祖国」——。ほぼ1年前の党代表者大会で党中央軍事委員会副委員長として公式登場している金正恩大将への言及はない。「大将」は参加しなかったのか。

観客席がざわめいたのは、約40分にわたる軍事パレードの終了直後だった。公式メディアのカメラマン、テレビ撮影クルーが仕切り壁の周辺に集まってくる。「現

れるようだ」、低いつぶやきが観客席に広がる。われわれのすぐ下に立つ在日朝鮮人祝賀団員たちが熱烈拍手、そして要人がゆっくり姿を見せると「万歳^{マンセー}」と大声が上がった。

カーキ色の開襟シャツ風ジャンパーを着た金正日総書記。遠くを見やりながら、手を振って観客の歓呼に応え、ひな段の正面へ立ち去った。続いて黒っぽい背広、痩せ形長身の金永南^{キムヨンナム}最高人民会議常任委員長。その後、やや光沢のある黒い詰襟人民服姿の金正恩大将が現れた。国内では総書記に同行する姿が報じられる機会が増えているが、外国人が参加する行事に2人そろって現れたのは、昨年10月の党創建65周年軍事パレード以来だ。離れている距離は直線にして8メートルぐらいだろうか。ぽっちゃりした、色白で大柄な若者、というのが金正恩氏の印象だった。

金正日総書記も、3年前に病で倒れたと報じられた後の写真や映像に比べると、しっかりしているように見受けられた。右ほおに少ししみが見えるが、周囲の手助けを受けたり、ひな段の縁に手を触れたりすることもなく、考えられるより早足だった。

●徐々に進むか後継作業

81年の訪朝時には、金日成主席は69歳で、まだ健在だった。「非同盟諸国食糧会議」を取材中の日本人記者団の1員として、恰幅の良い、自信いっぱいの姿を歓迎宴で目にした。

「党中央」として知られていた金正日氏は、前年の党大会で政治局常任委員・書記となったが、「謙虚な人柄」という当局側の説明はあったが、記者会見の要望はかなえられなかった。代わって、現在のナンバー2、当時の党国際部長だった金永南氏から『「速度戦」や芸術作品の近代化に寄与している」と説明を受け、「党大会に向け活躍中の金正日同志」という幹部向け記録映画を見せられた。

当時、空港や外国人の滞在するホテルの掲示板には、金日成・金正日父子が建設計画の模型を眺めている写真が飾られていた。

では30年後の現在、さらに次代への引き継ぎはどうなるのか。党機関紙「労働新聞」が党代表者会1周年の9月28日社説で「党と革命の前途を左右する根本問題は解決済み」としたように、後継者を金正恩氏とする方針に揺らぎはない。総書記の現時点での健康ぶり、外国人にも見える場所に「3大石碑」が現れ始めたことから判断すると、故金日成主席の生誕100年になる節目の来年を乗り切りながら、徐々に、金正恩氏の実績を積み上げる方式を採る可能性が高そうだ。

「3大石碑」とは、「おかげさまで幸福に暮らしています」の意味を「福^{ボク}」という文字に込め、3人の指導者名を刻み込んだ石碑だ。大同江の支流、普通江^{テドンガン}沿いのやや高台にある普通江ホテルの敷地内に、昨年秋の党代表者会後に新設された。

普通江沿いの道を左折して左側からホテルに近づくと、朝鮮文字3文字ずつを赤字で刻んだ白い石碑が3本立っているのが見える。ホテル手前の絵は、金正日総書記が生まれたとされる中朝国境近くの白頭山の森林の風景、書かれている標語は「21世紀の太陽・金正日將軍万歳^{スリョンボク}」(写真2)。道の左側の芝生内に「首領福^{チェンボク}」、右側手前に「將軍福^{ジャンボク}」、奥に「大将福^{テジャンボク}」の碑がある。ホテルへ向かう従業員の脇に立つ「大将福」碑で分かるように、石は薄く、高さは2メートル強(写真3)。逆に



写真2 普通江ホテル



写真3 普通江ホテル



写真4 普通江ホテル

ホテル側から見ると「大将福」がまず目に付く(写真4)。首領・金日成主席、将軍・金正日総書記、大将・金正恩党中央軍事委副委員長を、それぞれの石碑が代表している。

平壤市東部の工業団地内にある大同江ビール工場の玄関前広場にも似たような石碑が立っている。

いずれも、外国からの宿泊客や見学者の目には触れるが、その施設の関係者以外の一般市民はほとんど通らないような場所にある。「大将」をさらに内外にどうアピールしていくか、反応を探る試行錯誤の一環なのかもしれない。

権力移行期の金正日氏は、壮大な記念建造物と平壤市街の大規模開発を目に見える形で推進した。凱旋門、主体思想塔、何本かの幅100メートル大通りと沿道の高層アパート群、いずれも30年前には姿がなく、平壤の街の表情は一変していた。膨大な資金と労力がつぎ込まれたことだろう。金正日氏が父親に「成果報告」したこのような建設事業に相当する新分野を、今度は金正恩「大将」がどう切り開いていくのだろうか。

見学する機会があったエリート校、牡丹峰第一中学校の教室の教壇上の壁には、金日成、金正日両指導者の絵姿が飾られていた。別の抽象的イメージで「代を継ぐ革命」を訴える道もありそうだが、公式メディアへの露出ぶりから推察すると「大将」を加えた絵姿3枚がいずれ登場する可能性が高そうだ。単独の現地視察、「大将」自身の発言の引用紹介、新しい運動キャンペーンや標語が、いつ公式メディアに登場してくるのかという時期に焦点は絞られよう。

●翼カードと中国人観光客

DPRKの国旗色である赤と青を使い、翼マークが付いた「ナレ(翼)電子決済カード」を外国人用土産物店でよく見た(写真5)。外貨建てのICチップ埋め込み式デビットカードで、発行日時など4群4桁、計16桁の数字が刻印されている(うち4桁は自分で選ぶ暗証番号)。



写真5 翼電子決済カード

一行に随行した案内兼指導役が持っていたので見せてもらおうと「数年前から朝鮮貿易銀行が発行し、この銀行と関係のある機関、商店で使える。米国の経済制裁のせいで生まれた。それまでは国際的なクレジットカードが使えたのに…。それならば、わが国でやろう、と始めた」との説明だった。実際は今年1月から、空港、ホテル、銀行、国際通信センターなどで正式に使われ始めたようだ。パスモやスイカと同方式で、1枚3ドル(相当)でカードを買い切り、ドルやユーロなど外貨で必要額を預け入れて、店舗などのカードリーダーを通して決済する。使い残しは当日の朝鮮外為銀行レートを活用して同じ外貨種で戻してくれる仕組みだ。「祖国(DPRK)の大空を高く駆ける先軍千里馬の翼と精神を表している」とされる(*注4)。

社会主義国での現地通貨と外貨の交換は複雑な問題だ。ましてDPRKでは09年末に通貨交換とデノミネーション(通貨単位の変更)を行って一時かなりの混乱を招いたと伝えられてもいる。DPRK経済の建前は「資本主義的な市場経済を許さず、社会主義計画経済は崩さない。外からは必要な物だけを入れる」。それだけに、外貨流通を規制して一定枠内で管理する上で、「ハード」な取り締まりとは違う「ソフト」な手段になる可能性がある。

DPRKの通貨ウォンと外貨の交換レートは1ウォン=1.207円などと表示されているのだが(写真6)、外貨を現地通貨ウォンに交換してくれない。また、つり銭不足を理由に、ホテルの売店や食堂では急落していたユーロを受け取らないところも多かった。さらに、ドルや円で買い物をしても、おつりは中国の人民元で返ってくる。現地の物価感覚がつかめないままで滞在は終わった。

板門店には以前なかった土産物店が出来上がっていた。同じ建物の奥の部屋で人民軍中尉が板門店の歴史などを訪問者に説明するのだが、中国人団体観光客の買い物の歓声で解説がよく聞こえないほど、土

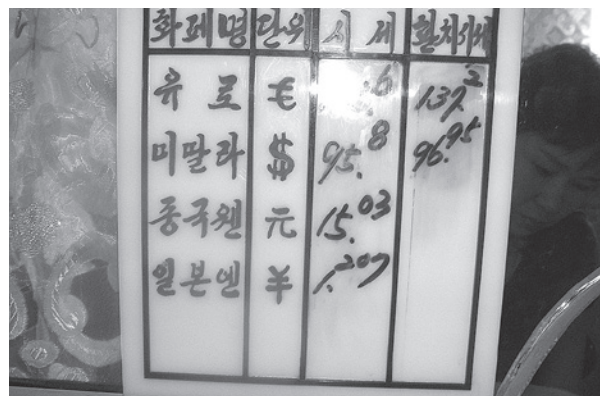


写真6 土産物産の交換率表示

産物店の商売は盛況していた。客と売り子のやり取りはもちろん中国語。そこで1瓶3ドルの蜂蜜を買った。5ドル札を売り子に渡すと、13人民元のおつりが戻ってきた（日本出発時に1元は約13円だった）。

普通江ホテルの売店で品物を買って細かなおつりが生じそうな場合は、ミネラルウォーターで埋め合わせた。ウォン表示の商品をカウンターに出すと、電卓におつりのウォン額が出る。それを中国元に換算してもらい、1本5元と分かっているミネラルウォーターを必要本数だけ棚から抜いてカウンターに持ってきて精算した。ソ連圏だったポーランドで、国際的通用力のなかった現地通貨ズロチのおつりの代わりにキャンデーを何個か貰った昔の経験を思い出した。

おつりで悩みません、時間もかかりません、というのがナレ・カードのセールスポイントだ。確かに外国人観光客には便利だ。

在米朝鮮人が引率した米国人観光客や、欧州からのいくつかの小団体も見かけたが、日本人は北京経由で観光に来たという数人だけだった。中国人団体がやはり圧倒的に多い。

朝鮮人参や鹿茸などの漢方薬が人気で、ニンジン・ゼリーなど土産菓子の包装も、圧倒的に中国人好みの鮮やかな金色や赤色だ。支払いもおつりも元、買い物をする観光客の頭の中は元だけで動いているはずだ。

1980年代後半、ベルリンの壁が崩れる前に訪れた東欧諸国を思い出す。「マルク経済圏」に完全に組み込まれ、ドイツ製品が幅を利かせていた。

ナレ・カードを使っている中国人観光客の姿は見かけなかった。このカードが外貨管理用に有効かどうか不明だが、人民元の現金は観光業界を中心にかなり大量に出回っている印象を受けた。中朝間の経済関係が拡大しているだけに、観光産業が突破口になって、なし崩し的に「人民元経済圏」がDPRK国内に広がる恐れはないのだろうか。

中国東北地方との経済関係は、確かに、観光や投資の面で急速に深まっている。

経済情勢について説明を受けたDPRK社会科学院の経済研究所教授、李基成博士は、元汀里から羅津港を結ぶ55キロの道路の整備が今年中に完了すると語った。「この道路は既に1次的につながっており、中国の国内輸送のための仲介輸送がわが羅津港から行われた」（吉林省琿春の石炭2万トンが羅津港から南方の上海に向けて海上輸送された）。「道路、港湾建設のためのセメント工場建設も中朝間で合意済み」という（中国の亜泰グループが羅先に建設する工場で、2年後に年間1万トン生産予定。）（*注5）

道路整備が完了すれば、中国の吉林省を走る高速道路から圈河税関、DPRKの元汀里税関を経て、羅先経済貿易地帯の羅津港までトラックで物資をスムーズに輸送できるようになる。

一行の訪朝直前、米中日ロなど8カ国の報道陣を含む約130人が、この経路で羅津港に集合、DPRKが一時は日本航路に就航させていた万景峰号に乗りテスト的な金剛山観光を行っている。羅先特別市は、メモなし、カメラとビデオの撮影なし、1列で立ち止まらず通り抜ける、という条件で、珍しく外国報道陣に市場内の見学を許した。中国製品が多かったという（われわれも平壤で市場見学を求めたが、実現しなかった）。

李博士はまた、乗用車を使った観光も始まっていると述べた（中国吉林省の旅行社が、旅行代理店や青年企業家など90人を集め、6月9日から2泊3日で乗用車24台を使って羅先を訪問）。

李博士は羅津港とハサン間の53キロの鉄道整備をロシアと協力して進めているとも述べた。直接言及しなかったが、金正日総書記とメドベージェフ大統領の首脳会談を受けて、ロシアとDPRK、韓国の3カ国を結ぶガス・パイプライン建設に向けた具体的検討作業が動き出している。

●「キラキラ日傘」と生ビール

平壤の街頭では、男性は総書記と似た開襟シャツ風ジャンパー、女性はパンタロン姿が多かった。

緑の部分に金糸や銀糸のラメやスパンコールが散りばめられていてキラキラ光る日傘を差している女性が目立った。黒色や紫色、レース付など、傘の色やスタイルはさまざまだが、この「キラキラ日傘」が今年の流行らしかった。一行を乗せたマイクロバスが猛スピードで飛ばすので、車窓からうまく撮れなかったのは残念だ（写真7）。昼の明るさの中でも、キラキラ日傘が通り過ぎると、陽の光が反射してハッとさせられる。（平壤からの帰途、中国の瀋陽に立ち寄った一行の数人は、



写真7 キラキラ日傘の女性

デパートで同じスタイルのキラキラ日傘がたくさん置かれているのを見たという)。学生の背負っているバックパックも30年前には見られなかったような鮮やかな色彩に変わっていた。中国製品の市場を通じた流入が増えているようだが、社会科学院経済研究所の原則論は固かった。

「わが国に開放を求める反対勢力は、自由化、つまり資本主義的な個人所有制度と市場経済を取り入れさせ、社会主義計画経済を崩そうとしているのだ。自立的民族経済の土台を築く上で必要なものだけ取り入れる」と李博士は指摘。「中国が改革開放を要求することはない」と言い切った。市場は「国家生産の製品で完全には賄えないような消費財を補足する補助的空間に過ぎない」とする。

住民に近い立場の人民委員会が注文制で需要をまとめ、中央で集約して生産に反映、国定商店網で手渡す、と別の研究員が補足説明を加えた。

筆者はホテル内にある書店で、別人がDPRKの年鑑を既に2冊購入した後に3冊目がいないかと尋ねてみたら「もう供給分は切れた。入手見通しは不明」と言われた。「供給」は「配給」と同じ意味合いで使われていた。果たして需要と供給がうまくマッチするのか、迅速な商品穴埋めが可能なのか疑問は残る。まだソ連圏崩壊前で社会主義統制経済体制下にあった東欧の国々を回った1980年代前半の旅行では、棚に商品が何ものもない、がらんとした国営商店を方々で見た。

「配給」をDPRKで「供給」と呼ぶことを李博士は確認し、食糧について問題があると認めた。

昨年と今年は「人民生活の向上」に最大の力を注いだとしながら、「昨年は農業部門への自然災害で食糧事情が緊張（不足）した」「今年も大雨により黄海南道など穀倉地帯で大きな被害が出た」と述べた。ではどのくらい不足なのか、と問われて「答えにくい質問」とかわした。

李博士が挙げた穀物収穫量は「05年で545万1000トン、最新数字は入手していないが600万トン弱まで増えているだろう」。

30年前の非同盟諸国食糧会議では、「900万トンの穀物生産実績を挙げ、近く1000万トンを目指す」というのがDPRKの報告だった。

1990年代後半に多数の餓死者が出た「苦難の行軍」と呼ばれる時代の傷跡の大きさだろう。同時に、国際支援を受けた影響もあってか、数字公表などの透明度はやや向上した。ジャガイモ4トンと穀物1トンに換算すると李博士は説明したが、30年前は穀物の内訳

がぼかされていた。

やっと上昇軌道に入っている現在でも、他の産業分野において、その時代の打撃は残っている。

「発電能力は700万キロワット以上あるが、設備などの更新ができていないため、能力の半分弱しか発電できない状態だ」と李博士。

少なくとも平壤では停電は大幅に減っているようだ。しかし、水曜日午後に市中心部にある中学校を見学した際には「近所の変電所が故障した」という校長先生の説明で、生徒たちは大型蓄電池に電子楽器のコードを器用つなぎ直して音楽講堂で歓迎コンサートを開いてくれた。別のときには雑居ビルで飲食歓談中に短時間停電が発生、店のテーブル脇に設置済みの2灯式バックアップ照明がすぐついた。従業員は停電に慣れた対応だった。

問題解決のため水力を基本に発電力の強化に努めているという。来年4月までに熙川水力発電所^{ヒチョン}で「15万キロワット2基、計30万キロワットの発電を始められると期待している」と李博士は言う。また来年末までに10万キロワットの軽水炉原子力発電所を稼働するとも述べた。6カ国協議では軽水炉供与に向けた協議をいずれ始めることになっており、核問題の外交議論になりそうだ。

李博士は「かつて中央と並立していた地方の軽工業も90年代中盤にすっかり疲弊してしまったが、モデル工場を中心としながら再興しようと動き始めている」とも述べた。

平壤では来年に向けて、万寿台や倉田地区^{マン ス デ チャンジョン}で「10万戸住宅建設」が進められている。有名な冷麺料理店も工事のあおりで閉鎖している。広い大通りを切り開き一帯を新規開発するのではなく、既存のアパート群を必要に応じて再開発する方式で、工事場所は点在している。中学校の停電も工事の影響を受けた可能性がある。このやり方なら資金を節約できるはずで、地についた生活向上の試みが始まっているのであれば、住民にとっても歓迎だろう。

一方、李博士は世界的な技術水準にあることを強調するように「核融合実験に成功」「バイオセル繊維の開発成功」と述べた。しかしよく聞いてみると、「基礎研究を完成、さらに強化する」「生産工程が今完成しつつある」という段階のようだ。

今後の長期的な経済発展の展望はどうか。当局者は、「強盛大国」から「強盛国家」へと目標水準を引き下げた事実はなく、並立する概念で、どちらも使っていると強調した。李博士は一方、2012年末までに目指しているのは「最終目標を達成することではなく、強盛国

家への確固たる土台を作ること」と慎重な言い回しをした。数字の先走りに歯止めをかける現実主義的姿勢と言えよう。

李博士によると、1月発表の「国家経済開発10カ年戦略計画」は、朝鮮大豊国際投資グループが国家の主要開発事業に必要な資金を導入するために打ち出したもので、「人民経済発展と関係してはいない」という。しかし、「インフラ整備など4部門に投資を呼び込み、対外貿易経済を発展させる」という「戦略計画」は、国内の生活経済に大きな影響を与えるはずで、内外の切り分けには無理がある。国家レベルで長期経済発展計画を打ち出しにくい状況下で、投資グループが来年から10年間で上げていく成果を最大限に取り込んでいこう、という役割分担なのかもしれない。

平壤駅に近い国営商店が並ぶ大通りを、金曜日午後1300メートルほど団体が散歩した。バスの車窓から通りの道端に見えた薬水（ミネラルウォーターなど清涼飲料水）、ピンス（かき氷）、花などを売るキオスクが、残念ながらこの通りにはない。建物の1階部分に靴や衣料などの国営商店が入っているが、客だけでなく店員の姿が見えない店もある。（ウィンドーショッピングはしない、予約で商品を預かっておいてもらい後で取りに来る、客のところに店の人が配送にも行く、というのがガランとした店内についての説明だった）。

その国営店舗群の中で、目立って客が多かったのが大同江ビールのピアホールだった。窓の外からのぞいて見ても、席は生ビールのジョッキを抱えた客で満員状態。少し先にライバルの平壤ビールの店もあったが閉店。30年前に飲んだ平壤ビールの重めの味を覚えている者には寂しかった。

大同江ビールは、中国産「ババリアン・ビール」との差をひらき、現在85-90%の市場占有率に達しているという。02年からドイツ技術を導入して販売開始。切れがあってコクもある、おいしいビールだ。年産5万リットルを、7万さらに10万リットルへ増産する計画。韓国や米国にも輸出しているそうだが、日本との商談は制裁があるためか成立していないと工場側は言っていた。

李博士は「人民生活の向上」を強調する重点項目の中で、「人民に人気のある商品や、国際競争力の高い商品に力を入れる」と指摘した。大同江ビールは、この面で「優等生」のようだ。

1万1000羽を飼うダチョウ牧場、7000トンのリンゴを収穫する大同江果樹総合農場も見た。ダチョウはオーストラリア（気候に慣らすため中国経由）、リンゴはイタリアから、それぞれ「総書記が選んでくれた最良の種」を導入したという説明だった。国防委員会傘下の人民

保安部に所属する、軍と警察の中間的性格の部隊「人民軍内務軍」が、いずれもかつて水田だった広大な敷地に建設した。「先軍」スローガンの具体化とも言えるかもしれない。「軍人上がりは何でもできるので、どこへ行っても重宝されます。でも建設専門事業部門が育ちにくなっている、という面もなきにしもあらず、ですがね」と雑談の中で話が出た。

ダチョウは皮や殻をバッグや飾り物にするほか、肉をソーセージにしたり、冷凍ブロックで平壤市内の国営商店に供給したりしているという。リンゴは生果ではなくドライフルーツに加工して出荷するそう。国営青果店や総合市場を見る機会がなかっただけに、どれだけ一般市民に出回っているかの流通実態は分らなかった。

家禽、果実など、食卓に並ぶ食べ物が多様になっていけば、国民は目に見える形で生活の質の向上を実感できるようになる。一時は落ち込んだとされる国民の平均的な体格を回復していく上でも栄養バランスは重要だろう。同時にやはり、基本食材の十分な量の安定的供給が肝心だ、という点に変わりはないだろう。

●「独自性の誇り」と情報化時代

平壤から開城、板門店へと南下する主要幹線道路は相変わらず揺れた。一行の乗ったマイクロバス「三千里」の後部に座ったためだろう。中国の瀋陽にある華晨自動車が、トヨタから「ハイエース」の技術供与を受けたモデルを基に、平壤の西にある南浦で組み立て生産した「金杯海獅（ジンベイ・ハイシ）」のDPRK国内での名前だ。かなり使い込まれている。（*注6）

その10日ほど前に、中国吉林省の良く整備された高速道路を走ったばかりだったので思わず比べたせいもあるが、アスファルト舗装の滑らかさがなくゴツゴツする。トンネル内の照明がついていない真っ暗さも同じだった。（もっとも、最新道路の一部は、例えば平壤市の北東、ダチョウ牧場の手前の道などのように、滑らかな舗装、トンネル内のきちんとした照明が備わっている）。

片側2車線の道路には側壁が新設されていた。また、幹線道路に沿ってずっと、人がすれ違えるほどの幅の側道が続いており、以前よく見た幹線道路上を歩く人の姿はなかった。側道には、重そうな四角型のカーキ色ザックを背負っているおばさんや、大きな荷物を見送る人、自転車をこいでいる人が結構たくさん行き交っている。都会型のプラスチック前かごを付けた自転車をこぐおじいさんもいた。

自転車は重要な移動手段のようで、トウモロコシの集団刈り入れ会場と思える「どこにおられますか、いとわしい將軍様」という横断幕のかかる畑の中の広場には、

30台ほどがきちんと並べられていた(写真8)。

小アンテナが上に4、5本立つ、携帯電話の中継塔らしい新施設も開城行き幹線道路わきにそびえていた。平壤市内の路上だけでなく、「開城金剛山」と称される開城北方の山(写真9)の中にある朴淵^{パギョン}の滝に行楽に来ていた家族連れの中にも、携帯電話を使っている人がかなりいた。全体で70万台近くが使われているという。電話機は2万5000円相当、プリペイド・カードを買い、一定以上の使用に対して従量料金を支払う、とは平壤滞在者の話だ。

外国人が使っている携帯電話機は、平壤空港で空港当局に一時預け、出国時に返却してもらうことになっている。国内で使われている携帯機器も国内専用、国際兼用で区別し、パソコン通信を含め外部との情報やり取りを管理しているようだ。

「一心団結」スローガンは多分、総書記称賛とともに、DPRKで一番たくさん目にする標語だろう。30年前の「オートメ化」は今では「CNC」(*注7)推進に置き換わっている。情報化の波は、工場運営だけでなく国民生活にも及ぶだろう。一心団結のための情報管理は、今後の重要課題になるはずで、中国当局との協力がこの面でも進むことが予想される。

平壤市内にタクシーの数が増え、車全体が多くなっている(写真10)。交差点の交通指導員に代わって、

30年前には見たことがなかった信号が設置されている。今年初めから、北欧諸国のように、1日中、ヘッドランプ点灯が義務付けられた。また中古車の事故を防ぐため整備不良車のチェックが厳しくなっている(写真11)。

たが、当局は車が増えている事態を手放しでは歓迎していない。少なくとも公式発言ではそうだ。

「産油国ではないので、ガソリンを使う自動車が増えるのは問題。あくまでも公共交通機関が中心」というのだ。田舎で徒歩と自転車、平壤で路面電車が主役だろうか(平壤の地下鉄は30年前に比べて路線も駅数も大きく増えていなかった)。

誇り高さはまったく変わっていない。30年前より南北の経済格差が開いたためか、韓国への言い方がきつい。「朝鮮という呼び方は5000年前からの伝統があります。南朝鮮が使っている『韓』はいったい何ですか。たかだか三国時代からでしかない。それに『韓民族』だなんて、中国人を指す『漢民族』と(表音文字である朝鮮・韓国語では)同じになってしまうじゃあないですか」。私の前回訪朝時にはまだ大学生で日本語を学んでいた、という案内兼指導役の人が憤慨する。

その勢いはわが方にも向かう。「高句麗初代王であった東明王陵のこの一帯を、1941年に日本軍が占領し軍事訓練をしました、その際に王墓内にあった遺物が全てなくなっていました」。



写真8 農村の自転車群



写真10 タクシー



写真9 開城金剛山



写真11 交通指導員のチェック

1960年代後半に韓国慶州の仏国寺キョングジュの上にある石窟庵ソククラムで「日本軍がお釈迦さま像の頭に埋め込まれていた宝石を盗んでいってしまった」と僧侶に言われたことを思い出した。

その慶州では新羅の全国統一を同郷の朴正熙大統領が評価し、大々的な整備・建設事業を行った。DPRKは朝鮮半島北部に由来する伝説的な檀君の遺骨を発見、DNA鑑定で5000年前の遺物と分かったとしている。それが「5000年の伝統…」の表現につながる。檀君陵は整備済みだ。朝鮮中央歴史博物館では「日本帝国主義の御用学者たちが、檀君は神話に過ぎない、と切り捨ててしまっていたのです」という説明となる。

もちろん、この誇りには現実的な調整が加えられる。板門店の休戦協定調印式上の掲示には30年前、朝鮮戦争への中国義勇軍の参戦は触れられていなかったが、今回はあった。「当時は、そこまで気が回らなかったのでしょう」というのが案内人の答えだ。日本との国交樹立に関係して当局者は、韓国の朴正熙大統領については米国の圧力を受けたとしながら、中国の周恩来首相への言及を避けた。首脳会談による日朝平壤宣言を評価した。

結局は提出しないで出国したが、「北朝鮮に10万円を超える現金などを持ち出す場合は申告するよう」求める税関書類が訪朝前に旅行社から届いていた（処罰の可能性にも言及している）。本来の申告基準は100万円なのだが、昨年7月6日から特例としてそうになっている。DPRKに対する制裁強化措置だ。動向を注目しているとDPRK当局者が述べていた民主党の野田政権は、新たな追加制裁措置をとらない方向を示唆している。

30年前には、北京1泊でビザを入手し入国する経路しかなかった。瀋陽空港の航空カウンターでビザを受け取れる便宜が図られるようになり、今は毎日ではないが、東京から平壤に同日中に到着できる。でも距離は近いのに往来は不自由だ。安い船便の道は閉ざされたままだ。

平壤で世話になった人々と30年前に交わした東京での再会約束は、まだ果たせていない。

*注1 共同通信は2003年8月18日に新聞、放送用に使われる配信記事以降、従来の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）という表記を「原則としてすべての記事で」略称だけの「北朝鮮」に改めた。NHK、次いで一部有力紙が採用した方針に追従した横並びの動きで、字数が多すぎるという技術的理由が内部では挙げられた。小泉首相が前年に訪朝して拉致家族の生死が明らかになり、翌年に被害者の家族5人が日本に戻って激しい平壤バッシングが巻き起こる時期だった。この報告では英文略称のDPRKを使用する。民族分断状態の中で、南部の大韓民国（韓国）は朝鮮半島全体を「韓半島」そして北部を「北韓」と呼んでいる。逆に北部では自らの国号である朝鮮民主主義人民共和国（英文でDemocratic People's Republic of Korea）を「共和国」または「朝鮮」と略称し、南部を「南朝鮮（場合によりさらに短縮して南鮮）」と呼んでいる。双方の関係も「南北」「北南」と呼称が異なるが、ここでは日本で定着している「南北関係」を使う。民族的な誇りと「朝鮮」「韓」については、本文の別の部分で触れる。

*注2 日本の新聞、通信、放送のメディアで仕事していた元言論人が主体で、夫人を含め総勢10人の団体行動だった。

*注3 1981年9月19日朝鮮中央通信。

*注4 10月1日参照のネットブログ。
<http://www.nkeconwatch.com/2011/03/24/dprk-unveils-narae-debit-card/>
ナレはナルゲ（翼）という朝鮮語の雅言、詩などで使う言葉だ。

*注5 10月1日参照のネットブログ。
<http://www.searchnavi.com/~hp/chosenzoku/news10/110922-2.htm>

*注6 似たような形で、南北合弁の形をとる「平和自動車」が西側メーカーの中国モデルを中国の自動車会社と組み立て生産協定を結んでDPRKの南浦工場で作った車が多く走っている。伊フィアットの中国モデル乗用車「シエロ」がフィパラム（口笛）、同ミニバン「ドブロ」がボックギ（カッコウ）などの名前で、DPRK内で売られている。30年前にあったような日本語が車体に残る中古車はすっかり姿を消している。ほかに独VW、BMW、ボルボなども少数走っていた。なお、平和自動車は韓国に本拠がある金剛山グループ系列会社で、統一協会系とされる企業。普通江ホテルも同グループ関連会社。

*注7 コンピューター数値制御、computer numerical control または computerized numerical controlの略。工作機械だけでなく工場の機械、さらには運営合理化も含むとされている。

報告



北朝鮮問題セミナー／第10回 (2011年9月28日 東京・学士会館)

金正日・メドベージェフ首脳会談とエネルギー問題

渋谷 祐・Shibuya Tasuku

早稲田大学アジア太平洋研究センター特別研究員

コメンテーター：姜英之(当研究所理事長)

モデレーター：小野田明広(当研究所副理事長)

渋谷講師は、石油連盟でクウェートやロンドンに長期にわたり駐在。民間シンクタンクなどで東アジア、カナダでも調査・研究に当たった。「ジオポリ」(<http://nic.main.jp/doc/geopoli96.pdf>に転載見本)というニューズレターを発行している。

8月20日から27日まで北朝鮮の金正日国防委員長(党総書記)が鉄道を利用してロシア東シベリア地域を回り、帰途に中国の内モンゴル自治区の満州里や黒竜江省の大慶を訪れた経路に沿って、エネルギー重要拠点との関係を逐次指摘した。

金国防委員長は東シベリアの天然ガスがパイプラインで輸送されている現場を直接に見て、実際に北朝鮮に供給可能なのか確認したかったのだらうという。列車内でのロシア側との話し合いと車窓からの視察で、パイプライン建設の有力経路である朝口国境地帯と、重要分岐点になり得るウスリースクに関連する情報を検証した可能性が高いとされた。また公式報道にはないが、別の重要分岐点スコボロディーノを非公式に訪れた可能性を韓国紙は指摘しているという。

24日にバイカル湖の南方ウランウデで行われた金国防委員長とメドベージェフ・ロシア大統領の首脳会談では、ガスをはじめとするエネルギーとロシア・北朝鮮の鉄道連結問題で共通認識に達した。歴訪終了後の9月15日にはモスクワでガスプロムが北朝鮮石油相とパイプライン推進のための合同作業委員会の設置についての覚書に署名、別個に韓国ガス公社社長とも会談してパ

イプライン建設の「ロードマップ」に署名したと発表した。

実務的な動きは速い。しかし、建設資金の集め方、北朝鮮がロシアに抱えている債務帳消しとの関係、パイプラインと鉄道の建設・整備を一括パッケージにする可能性など、今後の交渉課題はいろいろありそうだという。

金国防委員長は今回旅行で、極東最大のブレア水力発電所(出力2100万メガワット)を視察した。同発電所からの送電可能性を検討したのではなく、北朝鮮が電力供給能力の増加のために完成を急いでいる国内北部の熙川(ヒチョン)水力発電所(30万キロワット)の工事促進が狙いだったと思われるという。金国防委員長は帰国直後に後継者の金正恩・労働党中央軍事委員会副委員長を同行して熙川発電所を視察している。北朝鮮国内では「日朝韓3国パイプライン建設」は大々的に宣伝されていない。また、石油を北朝鮮に年間約50万トン供与している中国も、3国パイプラインに反応を示していないという。北朝鮮の経済自力更生路線と、3国パイプライン建設から得られるはずの「通過料」や人員需要、南北朝鮮関係の進み方なども不確定だという。

姜英之理事長は、「シベリア実利外交」が展開されようとしている、北朝鮮はロシアを対中カードに使いながらも、中国に立ち寄るなどバランスをとっているとコメントした。

会場での質疑応答で、3国パイプラインは国連制裁対象外との認識が韓国側から示されており、北東アジア全体のインフラ整備に絡むだけに日本も真剣に対応策を検討すべきだとの意見が出た。(編集部)

案内 第11回 北朝鮮問題セミナー

【テーマ】 北朝鮮の最新経済事情

第11回セミナーでは、最近北朝鮮を訪問してきた元朝日新聞記者でありジャーナリストの志村嘉一郎先生に見聞してきた最新北朝鮮経済事情を話していただきます。志村先生は著書に「東電帝国—失敗の本質」があり、全国講演にお忙しい中、お越しいただくことができました。

講師：志村嘉一郎(元朝日新聞記者)

日時：10月27日(木) 午後6時受付 6時半から8時半まで(終了後、自由懇親会)

会場：学士会館 306号室 東京都千代田区神田錦町3-28 電話03-3292-5936

会費：3千円(資料代を含む) *先着20名様に限らせていただきます。

主催：東アジア総合研究所(理事長 姜英之)

東京都港区新橋5-8-5 高島ビル3階 電話 03-6809-2125 FAX 03-6809-2126

申し込み方法：氏名、所属、住所、電話、メールを明記してFAXしてください。



編集後記

米同時テロ10周年に思う

2011年9月11日。アメリカで発生したあの悲惨なテロ事件から、早くも10年を迎えた。筆者はこの日、ある戦争のことを思い起こさずにはいられなかった。

1967年6月5日。この時、自分はイスラエルで生活していた。住所はハイファとナザレの中間に位置する「ダリヤ」という名のキブツ（農業中心の共同一体化社会）だ。ここでは午前中に畑仕事をし、午後にはヘブライ語の授業を受ける。問題の6月5日、いつものように果樹園でオレンジを収穫していたさなか、戦争が勃発した。第3次中東戦争（6日戦争）である。宿舎に戻るとさっそく空襲警報が鳴り、地下5メートルの防空ごうにもぐり込む。1時間ほどで解除されると、今度は空から戦闘機の耳をつんざく音が、地からは絶え間ない不気味な爆音が響く。男達は機関銃を手に、敵兵からの防衛に余念がない。女達は一所懸命窓ガラスにテープをはり、全体を黒く塗りつぶす。開戦を予期はしていたものの、最悪事態を考えると気が気ではなかった。

が、結局、エジプト、ヨルダン、シリア、レバノンを相手に、ダヤン将軍率いるイスラエル軍はわずか6日間で圧勝したのだった。戦後早々キブツの仲間と占領したてのエルサレム旧市街を訪ね、そこにあるユダヤ教、イスラム教、キリスト教それぞれの聖地をお参りしたことを鮮明に思い出す。

あれからもう44年も経つのに、世界を見渡すと戦争もテロも一向に止む気配がない。それどころか状況は一層複雑化し、「戦争とテロの撲滅」など全く現実離れしたものになってしまった。6日戦争が筆者にもたらしたものは、何人もの友の死だ。その後、取材という形でベトナム戦争の一端を体験したが、はっきりと言えるのは如何なる戦争も如何なるテロも「絶対に悪」だということである。9月11日は、これを再確認する日となった。

(清)

長春で感じたこと

先月は中国東北地方の長春市を訪ねてきた。10年ほど前に隣の吉林市で勤務したこともあって、大変懐かしい思いがした。飛行場からホテルに向かっている途中で、昔の記憶を辿りながら、町を眺めた。「長い春のように穏やかで、古い都」を楽しみにしていたのだが、どこにも見当たらない。

無秩序な交通と建築ラッシュで、発展を急ぐほかの町と変わりがなかった。広々とした大通りと高層ビルが並んでいた。もっとも私を驚かせたのは、ビルの激しい老朽化のスピードだった。10年前に新しく建てられたビルは、今やもうすっかり老朽化していた。もちろん隣に立派な新ビルが建てられていたから、余計に古く感じたのかもしれない。

中国都市建設統計年鑑によれば、現状、都市のインフラ向けに用いられる財政資金の内、メンテナンス経費の90%は地方当局の財政投入に依存している。中国の都市は猛烈な勢いで都市化を図ってきたが、各地の政府の業績に対する考え方が偏っており、重視されたのは高層ビル建設などの目に見える表面的な部分で、そのメンテナンスなど後回しにされてきた。まさに中国経済の負の側面の現われである。

「発展のための発展」は「持続可能な発展」には繋がらないだろう。

今年9月18日付の産経新聞は、景気動向の先行きを占う産業用や建設用機械の日本からの対中輸出に急ブレーキがかかっていると報じている。リーマン・ショック後の大規模な景気対策や欧米の金融緩和による投資マネーの流入で中国のインフレが加速し、金融引き締めを余儀なくされるという「副作用」が最大の原因であるようだ。

いずれにせよ、中国の経済発展が険しい道のりにあるのは言うまでもない。格差拡大で社会不安も高まっており、その解決策は、中国の一党独裁体制の抜本的な変革にしかない。

(R)

会員の申し込み

◎会員（年間）

- 《個人会員》 1口5千円
- 《法人・団体会員》 1口5万円

◎特典

会員は定期刊行物「東アジアレビュー」の配布を受け、その他の刊行物について特別割引、当研究所が開催するシンポジウム・セミナー参加、また委託調査事業において優遇を受けることができます。

◎会員の申し込みは、所定の申込用紙をFAXにてお送りください。

東アジアレビュー

THE EAST ASIAN REVIEW

2011年10月号

第21巻・第10号・通巻178号

2011年10月1日発行

発行人 姜 英之

編集人 平川 均

編集主幹 根津 清

編集委員

小野田明広（編集長）・長瀬誠・田村秀男・西和久・朝倉堅五・高永詰・前田幹博・李鋼哲・李燦雨・金丸知好・和仁廉夫・劉鋒・斎藤諭

編集スタッフ

橋本みゆき・堤一直・金暎淑

発行所 東アジア総合研究所

発 売 株式会社AIB

〒105-0004 東京都港区新橋5-8-5 高島ビル3F

TEL: 03-6809-2125 FAX: 03-6809-2126

http://eari.kau-kau.net/

印刷・製本 株式会社 東邦